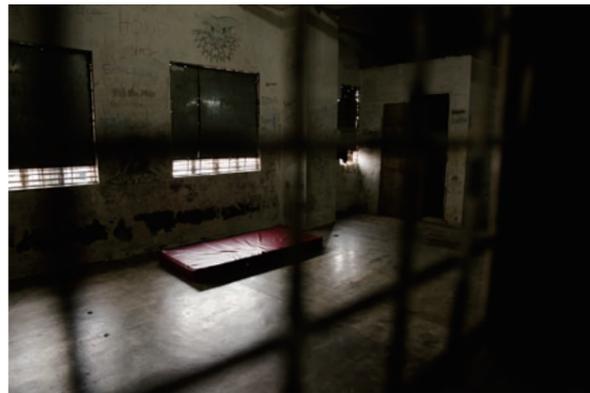


9歳 の 「 犯罪者 」



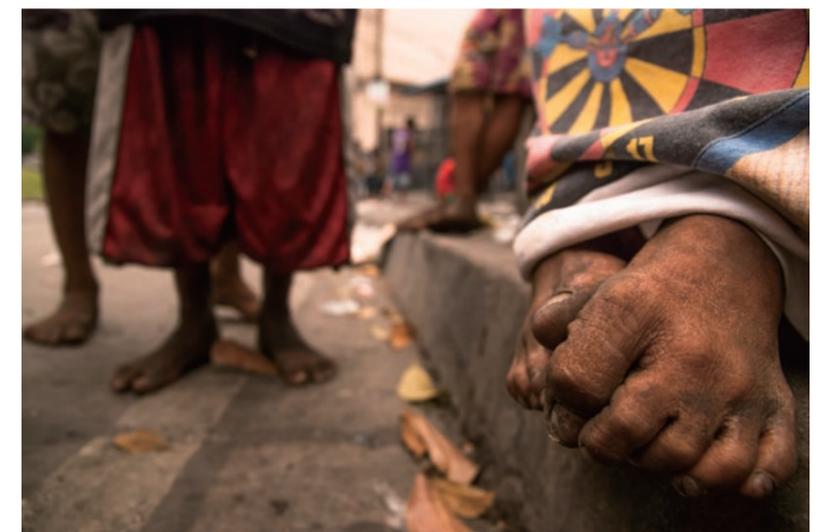
マニラで出会ったストリートチルドレン。生まれ育ったこの少年にとっては、生きることが全て



幼い子どもが一人で路上生活をするのは困難を極めるため、多くの子どもがギャングのメンバーに加わることで、他の大人から身を守っている。現行の少年法では刑事責任年齢が15歳以上となっているため、処罰の対象にならない15歳未満の子どもが積極的に犯罪に利用されるケースが少なくない。その年齢を9歳以上に引き下げること、子どもの犯罪を減らすのが法改正の狙いだ。

ここはマニラ首都圏にある青少年鑑別所。窓のほとんどを板で覆われた薄暗い部屋に、18歳までの青少年が常時30人ほど収容されている。設備といえば、プライバシーが確保されていない非衛生的なトイレと壊れたテレビがある程度で、子どもたちは床で寝ている。現行の少年法によると、鑑別所での収容は15歳以上、もしくは重犯罪を起こした12歳以上の青少年に限るとされている。しかし、明らかに10歳前後の小さな子どもが収容されていることも珍しくない。

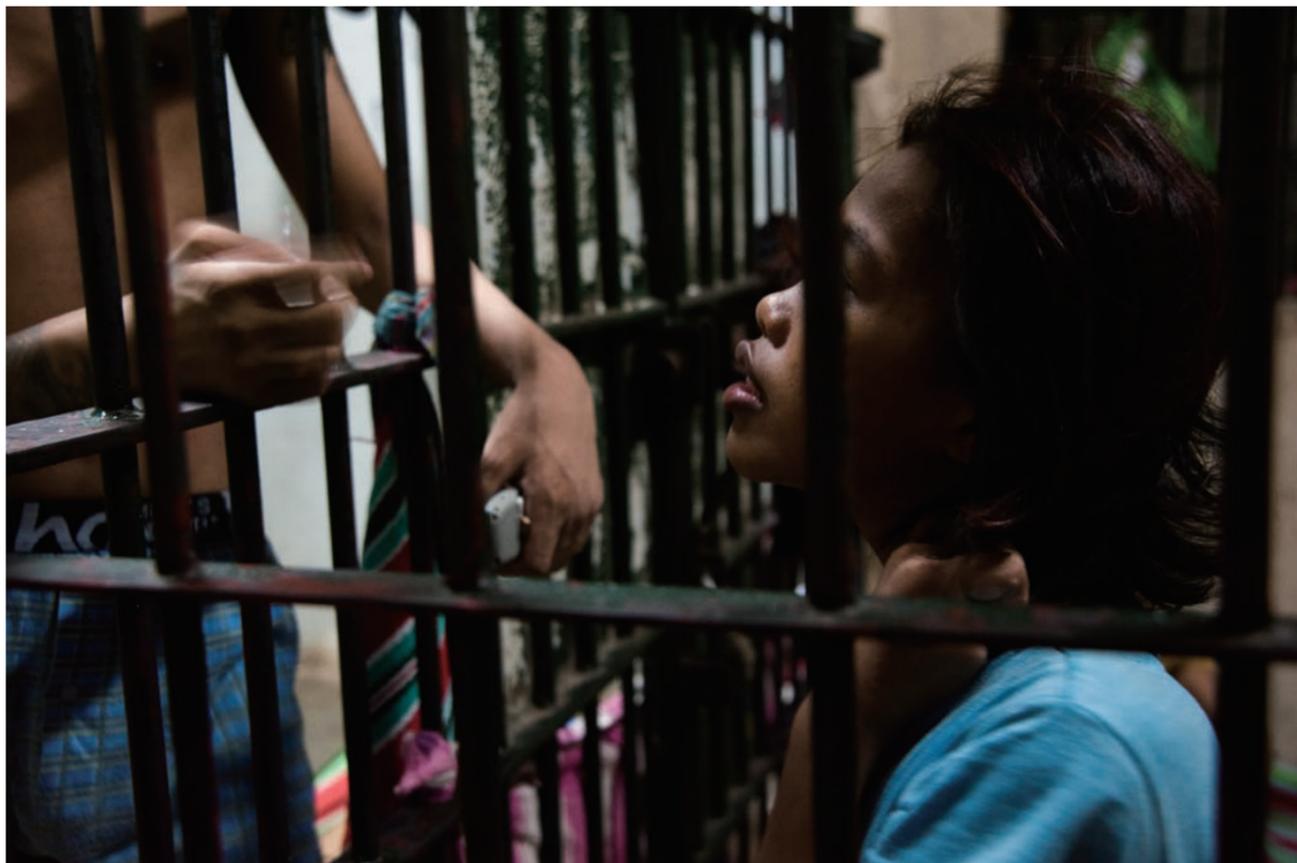
- a. ストリートチルドレンの生活は自由である一方、犯罪に巻き込まれる危険と隣り合わせだ
- b. マニラ首都圏にある青少年鑑別所。外が見えると逃げ出したいくなるという理由で窓がふさがれている
- c. 深夜、路上にいただけで留置所に連れて来られた13歳の少女。彼女は7日間ここにいるが、親が迎えに来ない限り出ることはできない



路上で生活する子どもたち。泥にまみれた足が生きることの厳しさを物語る

フィリピンで昨年6月、「刑事責任が問われる年齢を15歳以上から9歳以上に引き下げる」という法案が国会に提出された。

マニラ首都圏では、至る所でストリートチルドレンを見掛ける。彼らはどうして路上で生活することになったのか。現地で支援活動をしている日本のNGO「国境なき子どもたち」のソーシャルワーカーが、ある9歳の少年の話をしてくれた。「彼が幼いころに父親が家を出て、代わりに新しい父親が家によってきました。しばらくして弟が生まれましたが、それを機に父親の少年に対する態度が変わったそうです。食事を与えてもらえず、殴られる日々が続いたため、家を飛び出して路上で生活を始めました」





マニラ首都圏にあるパヤタス地区。こうしたスラム街でも子どもたちが未来を思い描ける日が来ることを願う



「若者の家」では、鑑別所から解放された少年や、家族と共に生活できない子どもたちが明るく生活している

清水 匡 (しみず きょう)

東京都生まれ。映画制作会社でカメラマンを務め、2003年にNGO「国境なき子どもたち」の職員となる。以来、世界各地で子どもたちの現状を見てきたが、さらに多くの人に伝えるべく、2016年にフォトグラファーとして活動を開始。「支援」と「写真で伝える」の二刀流で、子どもたちが抱える問題に向き合う。第4回日経ナショナルジオグラフィック写真賞「ピープル部門」優秀賞受賞。

- 清水さんの公式サイト www.kyoshimizu.jp/
- 「国境なき子どもたち」のウェブサイト www.knk.or.jp/



別れて新しいパートナーを見つける。冒頭で紹介した9歳の少年が新しい父親から暴力を振るわれる事例は、フィリピンのスラム地域では決して珍しいことではないのだ。

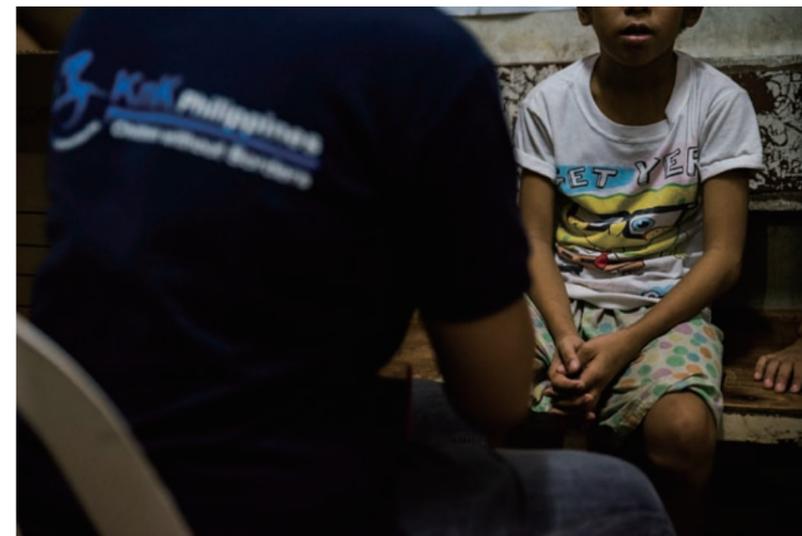
どんな理由があろうと、犯罪を見逃すことがあってはならない。しかし、将来の可能性がある子どもたちには、罰を与えるのではなく、更生や社会復帰に向けた教育やケアが必要ではないだろうか。

「僕はここに来て4カ月になります。建設用のドリルを盗んで捕まりました」と11歳の少年が話してくれた。子どもが一人で運ぶにはあまりにも重いものをどうして盗もうとしたのか不思議に思い聞いてみると、「売ったらもうかりそうな物を盗んで来いって言われたんです」と答えた。彼は逃げるなど考えず、とにかく高く売れそうな物を盗もうとしてここに連れて来られたのである。

不当に収容されている子どもの解放に必要な法的手続きを行うため、「国境なき子どもたち」は青少年鑑別所で道徳教育や心理ゲームなどを

行いながら、子どもたちへの聞き取り調査を実施している。そして、家族の受け入れが難しい子どもは「若者の家」という施設で受け入れ、いずれは家族の元で暮らせるように支援している。

新法案は子どもの人権侵害であると国内外のNGOや国連が警鐘を鳴らしており、9歳で責任能力があるか否かが議論の一つとなっている。ここで少し考えてみたい。子どもたちが犯罪に手を染めるに至る根本的な原因はどこにあるのだろうか。貧困生活者には、その日暮らして生計を立てている人たちも多い。仕事がないことで夫婦関係が悪化し、両親は



d



e



f

- d. 鑑別所での聞き取り調査によって、子どもたちの現状が見えてくる
- e. 心理ゲームでは、子どもたちが体の部位から連想する言葉を紙に書いていく。「手=ナイフ」「口=シンナー」といった言葉から、「手=握手」「口=笑顔」などへと導いていく
- f. 「若者の家」で勉強に励む少年。衣食住が安定して初めて、自分の将来を思い描くことができる

市民社会組織



2013年にフィリピンを横断した大型台風30号の被災地で支援活動をするCSO。CSOはそれぞれ自立した活動をしているが、災害時などにはネットワークを築いて協力し合う
©(特活)アジア・コミュニティ・センター21

国家による住民サービスが行き届かない開発途上国では、国内外の市民社会組織 (CSO) が社会的弱者の支援を行う場合が多い。フィリピンもその例に漏れず、CSOの活動がとても盛んだ。この国でCSOが成長した背景には、アメリカが残した民主主義的な教育により人々に市民意識が根付いたこと、スペイン、アメリカ、日本と続いた占領者に対する抵抗がさまざまな運動へとつながったことなどが挙げられる。

フィリピンの憲法には市民社会条項が盛り込まれており、そこには「コミュニティに基礎を置く組織を奨励する」という内容が明記されている。実際、CSOの代表らが財務大臣と国家予算について話し合うこともあるし、CSO出身者が国の重要な職に就くことも少なくない。財界が利益の一部をCSO活動に拠出する仕組みも存在する。政府に対して提言もするCSOは、政府と共に国づくりを担う重要な役割を持っているのだ。

フィリピンには相互扶助を意味する「バヤニハン」という言葉がある。CSOの自発的な活動は、こうした助け合いの伝統に基づくものと言えるのかもしれない。



あるCSOがセブ島で実施した「子ども育成ワーカー」の研修
©公益信託アジア・コミュニティ・トラスト

地球ギャラリー

フィリピンの文化を知ろう!

取材協力：日比NGOネットワーク

フィリピンの人気メニューといえば

豚肉と鶏肉のアドボ

米作りに適した気候で二期作もできるフィリピンでは、ごはんとおかずの組み合わせが食事の基本だ。今回紹介するのは酢と醤油と砂糖で材料を煮た「アドボ」。アドボは「漬け込む」という意味のスペイン語「アドバル」が語源といわれている。豚肉や鶏肉の他に、魚介類や野菜で作るアドボもある。

「フィリピンには甘酸っぱい料理が数多くあります。酢や醤油の他、パティス(魚醤)もよく使いますよ」と話すのは、ルソン島リサール州出身のアン

ガラ・グラディスさん。フィリピンの大衆食堂では、普通フォークとスプーンのみが用意され、ナイフはない。人々は右手に持ったスプーンをナイフ代わりに使い、器用に魚や肉を食べている。「どこの家の壁にも木彫りのフォークとスプーンが飾ってあるけれど、そこにもナイフはないですね(笑)」

フィリピンでは、食事中に突然お客さんが訪ねて来ても食卓に招き入れるのが当たり前。人々の間には分かち合いの心が根付いている。



【RECIPE】

●材料(4人分)

角切り豚肉500g/骨付き鶏肉500g/ニンニク小1玉/酢100cc/醤油大さじ5/砂糖大さじ2/ローリエ・コショウ適宜/サラダ油

- ① 叩いたニンニクと全ての材料を鍋に入れて混ぜ、1時間ほど漬け込む。
- ② 鍋を火にかけ、豚肉と鶏肉が軟らかくなるまで煮る。
- ③ 別の鍋にサラダ油を引き、②のニンニク、豚肉、鶏肉を取り出してきつね色になるまで炒める。
- ④ ③に②の煮汁を加えてひと煮たちさせ、煮汁が肉に絡んだら出来上がり。



ミンダナオ島ダバオ市のレストラン。テーブルには醤油と酢が常備されている ©Kae Yoshino